

いのちたすかるⅢ

加奈山 径

全作家協会の理事長、陽羅さんは、

「加奈山さんは病気の神様です。何しろ、何かというところ救急車で運ばれて、死ぬの生きるのと人騒がせなことばかり。それにひきかえ小生なんか可愛いもの、まあ『病気の仏様』といったところでしょいか」

と、おっしゃる。

いかにも神様に対して、仏様、と、へりくだった言い方をしているが、実のところ、神様よりは仏様の方が人間味があつて、むしろ、加奈山よりは陽羅の方が上位にあると、嬉しがっているのではないか。

神様仏様の話とはかく、私の病気のこととなると、どうやら神や仏に笑われそうなほど、またも「いのちたすかる」のレポートをしなければならなくなったのは、皮肉といえど皮肉、いや、むしろ馬鹿々々しくなるほどだ。

「いのちたすかるⅡ」は、戦時中のことを詩に書いたもので、少年時代のこと。病気でも負傷でもないが、「いのちたすかるⅢ」は、八十歳になつての肺炎、まさに死の境をさ

まよつたものであつた。

そして、今、ここに、再度の死の彷徨をレポートしなければならなくなったのは、やはり「病気の神様」に近いのかもしれない。

息苦しくなつたのは、昼寝から目覚めたときだった。

私の様子がおかしいと見たのは、やはり女の第六感だろう。むしろ私の方は、

「もう少し様子をみてから」

と、せわしなく呼吸をととのえていたのだが、彼女の方が、間髪を入れずに、一一九番のダイヤルを押した。

「主人の容態が異常です」

何がどう異常なのかの説明はない。ともかく、

「早く来てください」

のひとことだけだ。

いずれにしろ、当方、救急車のお世話になること、しばしば。彼女の一一九番への通報が、それなりの急を要したのか、数分で救急隊が到着した。

聖路加国際病院への急送は、見事だった。検査から手術までの手順は、実に迅速だった。特に、手術の許可を医師に与えた彼女の即決は見事だった。

当人の私の許可もなく、

「直ぐに手術して下さい」

と答えたのである。

当人、私の許諾は二の次だった。あとで聞くとところによると、

「こう言われれば、手術しかないでしょう。へ心不全です。このままですと、余命二年あるかなしかです。急を要します。いかが致しますか」、当然ながら、直ぐに手術して下さいと返事をしました」

ということだった。

余命二年というのには少々驚かされたが、私は、

「わかった、切ってくれ、どこでも」

と返事をしたようである。

病名、心不全（心筋梗塞）

手術、冠動脈、バイパス手術

胸をバツサリと切り開かれ、両脚から切りとった動脈を三本、心臓につなぐという荒っぽい手術。医師は早かったというが五時間たっぷりとかかった。その間のことは全く記憶にない。

当年八十二歳、糖尿病患者の私には酷であったが、余命二年を宣告されれば、胸を裂かれ、脚を裂かれても、やむをえないかと、心を決めた。

それにしても女の英断は凄かった。今、こうしてレポート出来るほどに、いのちがたすかったのだから。

ここで少々妻（入籍していない同棲の女）のことに触れておく必要があるだろう。何しろ、私の命の救いの神なのだから。

世に、〈押しかけ女房〉という言葉があるが、私の場合は、〈押しかけ亭主〉という形だ。それも、当時八十歳になろうとしていたオイボレジジイだ。しかも、〈亭主〉というより、病をかかえた、〈おろかなジイサマ〉といつていいかもしれない。何しろ、押しかけて以来、入院に入院を重ね、何度いのちを救けられたかしのれないのだから。

肺炎で死ぬ思いをし、糖尿病でヘモグロビンA1C8%強、脊柱管狭窄症で手術をし、肝臓傷で血の混じった膿を抜き、心臓外科で冠動脈バイパス手術をし、余命二年を宣告されるなど、〈押しかけ亭主〉どころか、〈押しかけ病魔〉である。

病魔の魔は、これこそ神の領域、陽羅さんの言う〈病気の神様〉に、ぴったり当てはまる。

神様は死なない。余命二年をどう切り抜けるか、それは、なべて、女の力による。

最後は、結局、のろけ話になったか。